



ぶらり らいぶらりい

～図書室にはこんな本があります～

No. 289

* 利用者からの質問をもとに昭和館図書室の資料をご紹介します。
(書名の後の()の数字は請求記号です。)

(問) 昭和 19 年なので配給制になっていたと思うが、当時の白米の値段が知りたい。

(答) 昭和館図書室の検索^{けんさくたんまつ}端末を使ってどのような資料があるか調べてみましょう。

図書室で所蔵する図書や雑誌の目次情報^{ふく}を含む書誌情報からキーワード検索ができます。まずはトップ画面の「なんでも検索」にキーワードを入力します。

➤ なんでも検索 ⇒ 白米 値段 ⇒ 13 件

ヒットした 13 件それぞれの目次情報を確認していくと、『値段史年表 明治・大正・昭和』(337/Sh99 開架一般 060001414) や『値段の明治・大正・昭和風俗史』(E337/Sh99/1 地下書庫江波戸図書 080005562) という図書に「白米」の項目^{こうもく}があることが分かりました。どちらの本も、ものの値段の移り変わりを調べるのに便利な本です。各項目には、情報の出所である出典も明記されていますので、情報元の資料もあわせて確認することができます。さっそく該当の図書を開いて確認してみましょう。

【白米】※東京における標準価格 10kg 当たりの小売価格

昭和 14 年 (11 月) 3 円 25 銭 …………… 昭和 20 年 (12 月) 6 円 (資料提供=食糧庁)
2 冊とも食糧庁のデータが載っていましたが、どちらも昭和 15 年から 19 年までの値段が抜けていました。

このようなときは！ 図書室の“レファレンスサービス”をご利用ください。

レファレンスサービスとは、調べものを司書がお手伝いし、資料や関連情報を提供するサービスです。内容によってはお受けできないこともあります。カウンターにご相談ください。今回のレファレンスでは、『物価の文化史事典』(337/Mo57 紹介本 000051565) から、昭和 19 年の配給米公定価格の情報を得ることができました。

昭和 19 年 精米 10kg : 3 円 57 銭 1 厘 / 品目別東京小売価格 (日本銀行調査)

図書室には、書棚に並んでいる図書以外にもたくさんあります。
検索端末を使って、読みたい本を探してみてください。
操作方法等、カウンター職員までお気軽にお問い合わせください。

戦争と天気予報

明治8年(1875)6月1日、東京府第二大区溜池 葵 町(現：港区虎ノ門二丁目)において内務省地理 寮の東京気象台(明治20年に中央気象台に改 称)が気象観測業務を開始してから、令和7年で150年の節目の年となります。この梅雨の季節、毎日の天気予報は欠かせないものですが、今回は戦争と天気予報についてのお話です。

明治16年(1883)、東京気象台が「天気予報」を発表し、当時の新聞「時事新報(現：産経新聞)」に掲載されました。しかし、8時間先までの予報だったため、新聞が読者の手元に届く頃には予報期間が過ぎていました。明治21年4月に天気予報が24時間先まで延長されると、他の新聞も天気予報を掲載するようになり、天気予報が広く普及するきっかけとなりました。NHKがラジオ放送を開始して天気予報を伝えるようになったのは大正14年(1925)。それまでは新聞だけが天気予報を知る唯一の手段でした。

気象(天気)情報は戦争において作戦の遂行や軍事戦略に不可欠な重要情報であるため、昭和12年(1937)7月、日中戦争が始まると軍部は中央気象台に気象情報の極秘 扱いを命じ、翌13年4月、陸軍大臣直 轄の陸軍気象部を創設、また翌14年10月には全国の測候所を国営にするなど観測体制を強化します。さらに太平洋戦争開戦当日の昭和16年(1941)12月8日午前8時、陸・海軍大臣名で「直ちに全国気象報道管制を実施すべし」と通達、新聞・ラジオ等による気象情報の報道や天気予報の掲載を禁じました(暴風警報のみ特例で発表)。気象情報は全て「赤本」と呼ばれた暗号書に掲載された乱数表を使って暗号化され、秘密保持のために改訂を繰り返し、厳格に管理されました。

気象報道管制が実施された後も、全国の気象台や測候所の職員は観測を続行していましたが、それは80年前の昭和20年(1945)6月23日に組織的戦闘が終結したとされる沖縄戦に巻き込まれた沖縄地方気象台の職員も同じでした。

昭和19年(1944)10月10日、那覇市は米軍による大空 襲(10.10空襲)を受け、市街は焼け野原となりました。翌20年3月23日、艦載機による空襲と激しい艦砲射撃による、いわゆる「鉄の暴風」と呼ばれる大攻撃が始まり、4月1日に米軍が沖縄本島に上陸します。

当時の沖縄地方気象台は現在の那覇空港に近い小禄村にありましたが、気象台での観測は無理となり、職員は観測を続けながら南に撤退することとなります。田中静夫台長代理の指揮のもと、38名の気象台職員が分散して南に向かいました。しかし、この撤退は単なる撤退ではなく、気象観測を目視で行いながら、福岡気象台経由で中央気象台へ気象情報を届けていたのです。この戦争末期、米軍艦に対してのゼロ戦による特攻攻撃は広く知られていますが、この特攻はむやみに行われていたわけではありません。通常、飛行機が飛ぶには快晴がベストですが、特攻の場合は快晴だとすぐに敵艦に発見されてしまいます。反対に低気圧による厚い雲も飛行に障害があり、「上層と下層の二層に雲があり、攻撃寸前にその下層の雲の間から敵艦に突入」できる気象条件が良いとされていました。「沖縄を守るため遠く九州・台湾から決死の覚悟で飛んで来る特攻隊員の身になって観測しろ」を合言葉に、敵の偵察機や砲弾が飛んで来る中を命がけで観測し、これらを全て暗号にして送信しました。

沖縄地方気象台の職員は最終的に現在の糸満市伊原にたどり着きますが、6月22日、田中台長代理は生存者12名に対して「一人でも良いから生き残り、沖縄気象台の最後を中央気象台へ報告せよ」と宣言して、組織的行動を停止し解散します。沖縄戦が始まった3月には気象台の職員は38名でしたが、戦後に生存が確認されたのは5名のみ、わずか数ヶ月の間に9割近い命が失われたことになります。壮絶な地上戦が行われた沖縄ですが、多くの気象台職員も犠牲になったのです。

(参考文献)

『特攻に殉ず 地方気象台の沖縄戦』(219.9/Ta82 閉架一般 000045894)

『沖縄に於ける気象職員の戦記』(916/R98 閉架一般 000037326)

『気象百年史 資料編』(451/Ki58/B 地下書庫和図書 000024934)



ぶらりらいぶらりい ~図書室にはこんな本があります~ NO. 289

2025年6月20日 発行/ 編集・発行 昭和館 図書室 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1